PR 〈企画・制作／産経新聞社メディア営業局〉

ブラジル移民の健康守る

戦後移住の1世を巡回診療 森口 志に感銘、グループで支援 中村

シミックホールディングス 代表取締役CEO **中村 和男** 氏 ＿ 対談 ＿ リオ・グランデ・ド・スール連邦大学医学部教授 **森口 エミリオ 秀幸** 氏

なかむら・かずお　1946年、山梨県生まれ。京都大学薬学部卒業後、三共（現・第一三共）入社。高脂血症治療薬「メバロチン」の開発プロジェクトリーダーを務める。92年、日本初の医薬品開発支援（CRO）を行うシミック（現・シミックホールディングス）を設立、社長に就任。

もりぐち・えみりお・ひでゆき　1958年、東京都生まれ。10歳で家族とともにブラジルへ移住。ブラジル連邦大学医学部卒業後、東海大学への留学などを経て、2006年からリオ・グランデ・ド・スール連邦大学大学院教授。祖父から3代にわたり日系移住者への巡回診療を行う。横浜市立大学などの客員教授も務める。

日本の医薬品開発支援（CRO）のパイオニアであるシミックホールディングス（東京）は、必要とされる医薬品をいち早く人々に届けるという本来の業務のみならず、社会貢献活動の一環として、ブラジルで日系移住者の巡回診療にあたる日系人医師、森口エミリオ秀幸氏の取り組みを支援している。巡回診療や、その支援を行うことの意義について、シミックの中村和男最高経営責任者（CEO）と森口氏に語ってもらった。

●忘れられた南部の移民

――日系移住者への巡回診療に対する支援の内容は

中村氏　森口先生の祖父、父、そして先生と3代にわたって行われている取り組みが継続できるよう、企業としての資金的な支援などを行っています。それ以上に力を入れたのが、取り組みを日本政府や日本国民にもっと知ってもらうことです。森口先生にはシミックの顧問になっていただいていますが、日本に定期的に来ていただいたときに「こんなことをやっているんですよ」とさまざまなメディアに告知・紹介して、取り上げてもらえるきっかけもつくっています。

ブラジルでは巡回診療に対する公的機関からの援助が減らされてきています。経済発展に伴って〝ブラジルはもう途上国ではない〟というのが理由です。また、移民の日系1世の方も高齢化しており、待ったなしの状況のなか、私たちに何ができることはないかという思いで支援させていただいています。

――日系1世というとずいぶん昔のような気がするのですが

森口氏　ブラジルへの日系移住者というと、100年以上前の明治期から戦前にかけての移住者を思い浮かべる人が多いかもしれませんが、高度経済成長を受け、最後の移民船が日本を出港したのは1971年なので。戦前の移住者は、サンパウロ周辺でのコーヒー栽培やアマゾン川流域でのコショウ栽培で大きな成功を収めた人も多くいます。

その一方で、1950～60年代の移住者はブラジルの南部に入植し、ものすごく苦労しています。1世の人たちは若いころは仕事に追われてポルトガル語を習うこともままならなかったのです。だから、病院に行ってポルトガル語で病状を説明して診察を受けるということができないうえ、経済的にも病院に行くことがなかなかできません。また、移住の際、「成功して落ち着いたら日本に送金するよ」といったのに、それがかなわず、恥ずかしく思って日本に戻れない人もたくさんいます。そういった人たちがいま80歳前後になって、医療が特に必要とされる状況になり、年1回、バスで巡回しながら診察を行っています。

●五島先生がつないだ縁

――シミックが支援を行うことになったきっかけは

中村氏　私はシミックを創業する前に勤めていた会社で「メバロチン」という高脂血症治療薬の開発リーダーを務めましたが、その際、日本の動脈硬化研究の第一人者で慶應義塾大学や東海大学の医学部教授を務めた五島雄一郎先生と出会い、先生が亡くなるまで公私ともにお世話になりました。その五島先生が東海大教授のときに、動脈硬化や老年医学を専門とする森口先生も留学で東海大に来られ、兄弟弟子のような関係で親しくなりました。五島先生からは「仕事をするときは森口と一緒にやれ」とよくいわれたのですが、森口先生が生活費を切り詰めて巡回診療の費用に充てるなど大変な苦労をしていると聞いて、支援させていただくことにしました。

――巡回診療の具体的な内容は

森口氏　ブラジルの農閑期にあたる8月の1カ月間、日本の全土よりも広い面積の地域をマイクロバスで移動しながら、15～20カ所で巡回診療を行っています。総移動距離は3000～3500キロになりますが、みなさん、巡回診療を心待ちにしています。私は横浜市立大学や千葉大学、防衛医科大学校で客員教授なども務めており、訪日の際に授業を受け持っていますので、その際、学生から希望者を募り、毎年5、6人がボランティアスタッフとして参加してくれます。移住して成功できなかったことを恥ずかしく思って日本に戻れない人がいるといましたが、そういう人は移住者の集落から離れて山奥に一人で住んでいることも多いのです。そのため体の病気だけでなく、うつなどの精神的な病気の人もおり、薬を出すことも大切な仕事です。実はブラジルは日本と違い、薬は公的保険が適用されず、全額自費なので、抗うつ薬や高齢者に多い循環器などの慢性疾患の治療薬は高いので、継続的に購入して服用することもなかなかできないようです。そういう人たちには年間を通じて薬も無償提供するので、巡回以外の費用もかかります。シミックグループにサポートしていただいて本当に助かっており、感謝しています。

●日本で最初のCRO

――大きな社会貢献ですが、シミックの事業内容は

中村氏　1992年、日本で最初に医薬品開発支援を主な業務として創業しました。以前は医薬品は製薬会社が研究開発から製造、営業まで自社で行っていましたが、研究所を維持するためにはなりません。売れなくなったら（資金面で余裕がなくなり）研究開発力が落ちる。その一方で、研究に特化して活動しているバイオベンチャーなどは新薬の〝種〟となる研究を数多く生み出しています。それらをつなぎ、治験や承認申請などの支援をすることで、世の中に必要とされる薬をいち早く患者さんに届けるという使命を果たしてきました。現在は開発だけでなく製造や営業の支援などにも事業領域を広げています。

年1回の巡回診療を喜ぶ移住者ら。バスの日の丸を見ると元気が出るという（森口氏提供）

また、新型コロナウイルス感染症のワクチン接種では、従来のように製薬会社から医薬品卸を経て医療機関で接種、という形でなく、政府が海外の製薬会社と直接交渉して、自治体などで集団接種するといった前例のない形になりました。そのことの重大さに気づき「harmo（ハルモ）ワクチンケアwithコロナ」という接種情報の管理システムを開発しました。これにより、タブレットとバーコードリーダーを使うだけで、接種情報を簡単に登録・集計でき、1回目と2回目の間隔やワクチンの種類の間違いを防いだり、特定のワクチンに問題が発生した場合はすぐに接種該当者に連絡ができるようになっています。

――新型コロナでは森口先生もブラジルで苦労されたのでは

森口氏　ブラジルでは当初、マスクが不足していたので、私の大学病院でも何人も感染してしまいました。はじめのころ、仲間が何人かいなくなって本当につらかったのですが、マスクがなくてどうしようかというときに〝そうだ、シミックさんにお願いしてみよう〟と思い立って連絡したところ、医療用のN95マスクや防護服をたくさん送っていただきました。コロナ対応で毎日2時間眠れるかどうかというくらい忙しく、家族にも感染させないため病院に泊まっていたのですが、心身ともにギリギリの状態のなか、本当に心の支えになりました。中村CEOが「はじめは外さないから心配しなくていいよ」といってくださったことは忘れません。

――今後の目標は

森口氏　南部の1世の人たちは「最晩年は、日本食を食べて日本語を話してもらいたい」とよくいっています。戦前の移民で成功した人が多く、日系人口そのものが多いサンパウロには日本の移住者向けの病院がなく、晩年を過ごせる高齢者施設が3つもあるのですが、南部の移住者にはそのような施設がありません。南部の1世のために高齢者施設を建設することが大きな目標です。

中村氏　病気が治ったら幸せなのか。そうではなく、その人らしく生きられることが大事で、「生きがい」こそが幸せなのではないかと思い、（傘下の事業会社も含めた）シミックグループのクリード（企業としての決意）にそのことを掲げています。森口先生の志とは共通するものがあります。

先生の巡回診療もコロナ禍により現在、オンラインで行われているようですが、デジタルのツールをうまく取り入れていければ、先生が定期的に訪日しているときでも移住者の診療ができるので、そういった分野でも今後、支援ができればと思っています。

森口氏、社会貢献者表彰受けて

森口エミリオ秀幸氏は7月、社会貢献支援財団（安倍昭恵会長）の「財団創立50周年記念表彰」を受けた＝写真。同財団が行っている「社会貢献者表彰」の過去10年間の500を超える個人・団体の中から特に大きな功績のある5個人・団体が選ばれ表彰された。森口氏は表彰式で、移住者向けの高齢者施設建設への意欲を示した。